

『日本靈異記』研究の文学史的位置付けと展望

——上代文学会シンポジウムより——

山口 敦 史

一 はじめに

二〇一五年度の上代文学会シンポジウムは、十一月十四日に國學院大學にて開催された。テーマは「日本靈異記——その文学史的位置付けを考える——」。パネリストは、仲井克己・三浦佑之・河野貴美子の各氏。主旨は、以下の通り。

『日本最初の仏教説話集』というのが『日本靈異記』の、各種辞書等における位置付けであろう。『日本靈異記』については、さまざまな学問分野（歴史学・仏教学・日本思想史など）からの、多種多様なアプローチがされてきた。そこには、研究方法の変遷や、『日本靈異記』に何を読み取るか、などの時代状況の反映があったことは否定できない。

今回のシンポジウムでは、上代文学、ひいては日本

文学史の上で、『日本靈異記』をどのように位置付けるのかという観点から、異なる方法論を持つ論者に、『日本靈異記』の研究方法のあり方について論じてもらい、その文学史的位置付けと展望について考えることとする。

当日、パネリストは充実した報告をしてくださった。会場の質疑も活発であったが、司会の不慣れや時間の制限もあり、論じきれなかった問題を多く残した結果となった。パネリスト各位の報告内容は本誌に掲載されるであろうから、ここではシンポジウム全体を通して、司会であった稿者が感じた感想や意見を述べてみたい。

二 朝鮮半島の仏教と『日本靈異記』

仲井克己氏の発表では、『日本靈異記』の撰述者である

景戒は、朝鮮半島系の人物、または朝鮮半島の人間の関係者、という仮説を提唱していた。

景戒の出自については、これまで私度僧出身者だという説^①、小子部氏関係者説^②、大伴氏関係者説^③、紀州海草郡出身者説^④など、多様な説が出ていた。そのような研究状況で、仲井氏は景戒の朝鮮半島出身者（または関係者）説を主張した^⑤。確かに、『日本靈異記』中では朝鮮半島の要素をうかがわせるものが見られる。それは説話中の舞台などで現れる場合と、文章中に典故として朝鮮半島出身者の著作が引用される場合とから推測できる。

前者の例では、まず、上巻序文で、「原夫れば、内経・外書の日本に伝はりて興り始めし代には、凡そ二時有りき。皆、百済の国より浮べ来たりき^⑥」ことに注目したい。これは仏教も儒教も百済から日本に伝来したのだ、ということ を述べている。これが『靈異記』全編の冒頭となる。上巻第四縁で、円勢師は「百済の国の師なりき」とある。「百済」の記載は、上巻十七縁・上巻二十六縁にある。また、上巻第六縁では、老師行善は推古天皇の時代に「遣はされて高麗に学びき」とある。高句麗滅亡の史実（六六八年）の反映が見られる。続く上巻第七縁では、いわゆる白村江の戦い（六六〇年）にともなう百済救援のための出兵が描かれている。上巻二十八縁では、道照法師が「大唐」に渡

り、さらに「新羅」に行ったことが記されている。

これらを概観すると、説話の舞台として朝鮮半島が描かれる場合は、半島の風土や生活様式が詳細に描写されるのではなく、概念的・抽象的な描かれ方となっている。

後者の例は、『日本靈異記』に引用されている典籍のなかに、朝鮮半島で撰述された典籍が含まれているという問題である。

狩谷椽斎の『日本靈異記攷証』以来、新羅僧・太賢撰述の『梵網經古迹記』が典故として多く引用されている点については、諸氏の指摘があり、周知のこととなっている^⑦。

しかし、これまでの研究では、引用箇所の研究は盛んに行われてきたが、なぜ『梵網經古迹記』を使用したのか、という点については、十分な研究がなされてきたとは言えない。実際には、「大集經云」（中9）、「長阿含經云」（下4）、「十輪經云」（下33）などあるように、經典の語句を孫引きしており、『梵網經古迹記』は類書としての使用ということになる。なぜ、『梵網經』の注釈書を類書として用いたのか、という問題も焦点があてられて然るべきであろう。

『梵網經』は、『続日本紀』天平勝宝八歳十二月三十日条の記事に初めて現れ、南都の諸寺に梵網經講師を要請する内容となっている。そこでは、「菩薩戒を有つことは、梵網經を本とす^⑧」とある。その後、天平宝字元年正月五日条、

天平宝字五年六月八日条に登場した後、六国史には一切登場しない。これは『金剛般若経』(十九件)・『大般若経』(六十二件)・『法華経』(二十四件)などと比べて少ない。しかし、奈良時代に日本に舶載された『梵網経』注釈書は、『大日本古文書』では「元暍」「義寂」「勝莊」「智周」「靈溪釈子」「濱法師」「五明法師」撰述のものがある。このうちの元暍と義寂は新羅人である。奈良時代における『梵網経』の位置付けと『日本霊異記』に及ぼした影響については、考えるべき問題をはらんでいると思う。

また、『日本霊異記』研究の上で重要とされてきた下巻序の記述にも、朝鮮半島関係典籍の影響が指摘されている。

羊僧景戒、学ぶる所は天台智者の問術を得ず。悟る所は神人弁者の答術を得ず。是れ螺を以て海を酌み、管に因りて天を闢るがごとし。伝灯の良匠に匪ずして、強ひて訂斯の事を睽みる。轍を淨刹に尅き、心を覺路に奔す。遠く前の非を愧ち、長に後の善を折フ。奇異しき事を注して、言提フル流に示し、手を授けて勤めむと欲ひ、足を濡ギテ導かむことを欲ふ。庶はくは、地を掃ひて共に西方の極楽に生まれむ。単を傾けて同じく天上の宝堂に住まむと者へり。

この中の、「天台智者」と「神人」の問答部分、そして「螺」と「管」のくだりが、『元暍撰述』『涅槃宗要』にある

ことを出雲路修氏が指摘している¹⁰⁾。これも、なぜ『涅槃宗要』が引用されたのか、典籍使用の背景を含めて考察できないのではないか。

これらの、朝鮮半島関係典籍の利用の問題は、奈良時代にさかんに作成されてきた仏典注釈類の動向と関連させて考える必要があるのではないか¹¹⁾。

奈良時代に日本在住の僧侶らによって作成された仏典注釈の撰述者としては、智光・善珠・護命・行賀・道璿・常騰などがいる。それらのうち、智光と善珠は『日本霊異記』の登場人物でもある¹²⁾。

例として挙げると、善珠撰述『本願薬師経鈔』に引用されている経典は、書名のあるものだけでも五十八カ所あり、そのうち、「倫」「倫法師」は五カ所ある。これは現在散逸した遁倫撰述の『薬師経疏』と思われる。また、「仏地論」(一五八上)・「彼論」(一五八上)とあるのは円測撰述の『仁王経疏』(大正蔵三十三)のことと思われる、いずれも新羅僧の著作である¹³⁾。

この現象を考えるには、新羅僧が中国(そして日本)でどのように認識されていたかという問題を考慮するべきだろうと考える。例えば、『元暍』『宋高僧伝』巻第四では、『唐新羅国黄龍寺元暍伝』(大正蔵五十、七三〇a)として紹介されている。このほか、『統高僧伝』では、『唐新羅国

皇隆寺釈円光伝」(大正蔵五十、五二一c)、「唐新羅国大僧統釈慈藏伝」(大正蔵五十、六三二b)とあり、『宋高僧伝』では元暉のほかに、「唐新羅国順璟伝」(大正蔵五十、七二八a)、「唐新羅国義湘伝」(大正蔵五十、七二九a)という記載もある。あたかも「新羅」は「唐」の一部であるかのような扱いである。これらの新羅僧は中国の高僧伝の一角を占めるものとして掲載されている。当時の唐が形成する文化圏の位置付けを考える必要とともに、東アジアの文化圏の問題として考える端緒ともなり得るのではないか。また、「日本」は中国の高僧伝の系譜からは一貫して排除されていることも考慮する必要がある。

三 戒律と「心」

三浦佑之氏の発表は、日本各地に伝承されている民話・昔話と『日本霊異記』説話との関連についてであった。三浦氏は、民話・昔話に見られる「心」が「日本列島人に意識された最初は、おそらく仏教と律令によってであった」と説く。これは言い換えると、日本の民話・昔話に頻出する慈悲の「心」や悪い「心」などは、仏教によって見出されたもの、ということになるだろう。

三浦氏の発表は、改めて、『日本霊異記』の「心」について考えさせてくれる契機となった。漢訳仏典における

「心」は、多様な意味があるが、漢籍の『淮南子』詮言訓「聖人勝心」の後漢・高誘注「心者、欲之所生也」の意味に通じるであろう。

『日本霊異記』で、「○○心」として表記される主立った語を挙げると、

悪心……上序、中11、下序

悲心……上10、上29、下15

慈心……上16、上21、中12、中40

慈悲心……下39

愛心……上31、中41

誹妬心……中7

などがある。このほかに「慚愧心」(中9、下38)・「怨讎心」(中18)などもあり、これらの語は、説話の主題に密接に関係しているだけでなく、登場人物の行動や心情を規程・統御するものとなっている。

例えば、「愛心」について言えば、上巻第三十一縁の御手代東人は、観音に銭と米と女を授けてくれるよう祈願する。その後、病気の娘を平癒させると、娘は「東人に愛心を發し、終に交通ぐ」となる。東人は親族の怒りを買ひ、監禁されたりするが、結果的に富貴を得る。「愛心を發し」た娘は数年後に死ぬことになるので、悪行の報いがあったといえなくもないが、娘を直接批難する言辭はない。

一方、中巻第四十一縁では「愛心」は二箇所あらわれ、「愛心」を懐いたものは死を迎えることになる。これは「悪契」であるとする⁽¹⁴⁾。

両話とも、「愛心」の報いが「死」であることは共通しており、『日本霊異記』の一貫した論理なのだといふことがわかる。説話の文脈と、「善」「悪」などの用語の用いられ方には、十分に注意する必要がある。

四 中国仏教説話集と『日本霊異記』

河野貴美子氏の報告は、『日本霊異記』と漢籍・漢訳仏典との関わり、さらに中国・日本の目録類を通して『日本霊異記』のジャンルとしての分類項目にも言及したものだ⁽¹⁵⁾。

漢籍・仏典への留意、そして漢語の用字・用法への注意、という提言には、全面的に賛意を表するものであるが、稿者は、『日本霊異記』研究においては、『冥報記』と『金剛般若経集験記』を特に重視するべき、と近年考えている。そして、この両著の明白な違いに留意すべきだとも考えている。

『日本霊異記』上巻序文には、次のようにあることはよく知られている。

昔、漢地にして冥報記を造り、大唐国にして般若験

記を作りき。何ぞ、唯し他国の伝録をのみ慎みて、自土の奇事を信じ恐りざらむや。粵二起ちて自ら瞞るに、忍び寝ムコト得ず。居て心に思ふに、默然ルコト能はず。故に聊かに側二聞けることを注し、号けて日本国現報善悪霊異記と曰ふ。上・中・下の参巻と作し、以て季の葉に流フ。

『冥報記』は『日本霊異記』は言うまでも無く、『今昔物語集』にも多く引用され、日本文学に大きな影響を与えたことが知られている⁽¹⁶⁾。

『冥報記』の序文では、私見では、

- ① 識と行と常理
- ② 上智と中品と下愚
- ③ 無報の説三つ——自然説・滅尽説・無報説
- ④ 仏教伝来以前にも善悪の応報はある
- ⑤ 三報について——現報・生報・後報
- ⑥ 先人の著作
- ⑦ 撰述の意図

といった内容が順に説かれている⁽¹⁶⁾。そこで強調されていることは一言でいうと〈因果応報の真実〉である。善悪の応報は必ず起こるし、よって人々は善行に努めなければならぬ⁽¹⁷⁾。

『金剛般若経集験記』が後世に与えた影響については、

中国においては、一部の説話が『三宝感応要略録』（非濁撰・大正蔵五十一）・『持誦金剛經靈驗功德記』（著者不明・大正蔵八十五）に引用されている。また、日本については、『金剛般若驗記屏風面廿四枚』（『小野経蔵目録』による）や、三善為康が『金剛般若経』の「驗記一卷」（藤原宗友撰『本朝新修往生伝』による）を作ったことが知られている。¹⁹

『金剛般若経集驗記』の序文は、

- ① 般若の教えの偉大さ
- ② 般若の教えによってもたらされる境地の素晴らしさ
- ③ 知識・智慧を持つこと
- ④ 般若の教えの靈驗談をまとめた
- ⑤ 読者への呼びかけ

から構成されている。¹⁹このように、『金剛般若経集驗記』では（般若の教えの偉大さ）が主題であると看取できる。この（般若の教え）を具現化したものが『金剛般若経』であり、『金剛般若経集驗記』では全編が『金剛般若経』の靈驗譚となつている。すべての困難を解決するのが『金剛般若経』の保持している「力」ということになり、主題の明確化と、ある種の単調化・単純化が見られる。しかし、それは一面では、主題の先鋭化とも受けとめることが可能で、おそらく景戒はそう考えたのではないか。²⁰

よつて、『日本靈異記』上巻序文に『冥報記』と『金剛般若経集驗記』の書名があることは、たまたまではなく、異なる主題を持つことを意図して、車の両輪のように二つを置いたのではないかと考える。それは、ひとつは（因果応報の眞実）、もうひとつは（般若の教えの偉大さ）経典の力の顕現²¹というように。

さらに言えば、『冥報記』が先行して存在し、その後には『金剛般若経集驗記』が編纂されたことも、景戒は明らかに看取していたであろう。なぜなら、『冥報記』の「陳公夫人豆盧氏」の説話が、『金剛般若経集驗記』延寿篇第二にも「唐臨冥報記曰²²」として引用されているからである。より景戒に近い時代の説話集・靈驗記として『金剛般若経集驗記』を見ていたとは言えるのではないか。

もちろん、それら以外の舶載典籍の影響関係も、考慮すべきなのは当然である。

五 おわりに——残された問題

『日本靈異記』シンポジウムとしては、触れられていない問題も多かったことと思う。会場の参加者からも意見があつたが、例えば、法相教学と天台教学との間で、景戒はどのような立ち位置にいたのか、という問題、また、『東大寺諷誦文稿』などの同時代の仏教関係典籍との関連をど

う考えるのか、などの問題提議や疑問の表明があった。

稿者としては、奈良時代に日本国内で作成された仏典注釈書との関連についても触れたかった。智光や善珠などが作成した仏典注釈は、奈良時代（から平安時代初期）の日本における仏教教学の認識の質を明らかにするものであって、切り捨ててよい問題ではない。「法相」とか「天台」とかを公式的・辞書的に当てはめて理解することはもはや無効で、奈良時代の日本における知性の質において考察すべき時期がきていると考える。

『日本霊異記』は日本史、仏教学、宗教学、日本思想史など、さまざまな関連諸学問からのアプローチがある。これらの学問分野からの裨益を大事にするのは当然のことであるが、「日本文学」研究のなかの『日本霊異記』の位置付けや評価はまだ未確定と言えるのではないか。「日本文学」研究の立場からすれば、愚直に研究の蓄積を積むことによって、文学研究としての『日本霊異記』の存在意義を確立していくことしかないのではないかと思う。

当日、参加・協力してくださった全ての方に感謝申し上げます。

注

(1) 益田勝実「日本霊異記」(『国民の文学 古典編』お茶

の水書房、一九五四年)。

(2) 柳田国男「雷神信仰の変遷」(『妹の力』)。

(3) 鹿苑大慈「日本霊異記の成立過程」(『龍谷史壇』第四十二号、一九五七年七月)、志田諄一「景戒の出自」(『日本霊異記とその社会』雄山閣、一九七五年)、原田行造「日本霊異記編纂者の周辺とその整理」(『日本霊異記の新研究』桜楓社、一九八四年)など。

(4) 橋本正「霊異記の研究」(『日本仏教文化史の研究』中外出版株式会社、一九二四年)。原田・志田(3)前掲論文、黒沢幸三「『霊異記』の編者景戒」(『日本古代の伝承文学の研究』塙書房、一九七六年)、丸山顕徳「景戒の出自とその背景」(『日本霊異記説話の研究』桜楓社、一九九二年)など。

(5) 景戒渡来人説は大谷義博氏が論じている(『霊異記の作者景戒は帰化人か』『古代文学』第四号、一九六四年九月。ただし大谷氏の文章は四〇〇字ほどの短文)。また、原田行造氏(3)前掲論文、中田祝夫氏(『解説』中田祝夫校注・訳『日本霊異記』日本古典文学全集、小学館、一九七五年)もその可能性について触れている。

(6) 中田祝夫校注『日本霊異記』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年)。以下同じ。引用文中における傍線は引用者。以下同じ。

(7) 禿氏祐祥「日本霊異記に引用せる経卷に就て」(『佛教研究』第一卷第二号、大東出版社発行、一九三七年七月)、原口裕「日本霊異記出典語句管見」(『訓点語と訓点資

料」第三十四輯、一九六六年十二月）、露木悟義「景戒の依拠した経典」（『上代文学研究会会報』第十五号、一九六六年一月）、同「靈異記引用経典の考察」（『古代文学』第六号、一九六六年十二月）、同「靈異記の仏典受容」（『上代文学研究会会報』第二十号、一九六九年七月）など。

(8) 『続日本紀』の引用は、新日本古典文学大系本による。

(9) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋文庫、一九三〇年）。

(10) 出雲路修校注『日本靈異記』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九六年）。

(11) 拙稿「日本靈異記」と「天台智者」——「神人」との問答と『涅槃宗要』——（『日本靈異記と東アジアの仏教』笠間書院、二〇一三年）。

(12) 拙稿「奈良時代・仏典注釈の世界と善珠撰述経典の言説」（注（11）前掲書）。

(13) 拙稿「本願薬師経鈔」と東アジアの仏典注釈」（注（11）前掲書）。

(14) 中巻第四十一縁の「愛心」について論じたものに、大塚千紗子「『愛心深入』における女の因業——『日本靈異記』中巻第四十一縁——」（『古代文学』第五十二号、二〇一三年三月）がある。

(15) 八木毅「日本靈異記と冥報記」（『日本靈異記の研究』風間書房、一九七六年）など。

(16) 『冥報記』については、内田道夫編『校本冥報記』（東

北大学文学部支那学研究室、一九五五年）、内山知也「唐臨と『冥報記』について」（『隋唐小説研究』木耳社、一九七七年）、方詩銘輯校『冥報記 廣異記』（古小説叢刊、中華書局、一九九二年）、伊野弘子訳注『冥報記全釈』（汲古書院、二〇一二年）など参照。

(17) 山本大介「自土の奇事」を書く——『日本靈異記序文と「他国の伝録」——」（『古代文学』第五十二号、二〇一三年三月）では、説話集レベルでの『靈異記』と『冥報記』の関係性について論じる。

(18) 川口久雄「敦煌と弘法大師の文学」（『敦煌よりの風 2 敦煌と日本の説話』、明治書院、一九九九年）。『小野経藏目録』は仁安三年写。『龍門文庫善本叢書』第十二巻（勉誠社、一九八八年）を参照。ちなみに、『本朝新修往生伝』「三善為康朝臣」の伝には、「毎日読誦金剛般若経二三巻。誦誦之間全絶二余言一。感三経功能力。作二験記一卷」（大日本仏教全書本）とある。

(19) 山口敦史・今井秀和・迫田（呉）幸栄「校訂 金剛般若経集験記（二）」（『大東文化大学紀要・人文科学』第五十一号、二〇一三年三月）参照。

(20) 唐の玄宗は『金剛般若経』を重視する政策をとり、その影響で（唐の）法相宗では同経への信仰が隆盛し、孟献忠の『金剛般若経集験記』撰述に繋がったとする論がある。そして、天平勝宝六年に帰国した入唐廻使の影響により、藤原仲麻呂は日本で『金剛般若経』を大量書写した、という。山本幸男「天平宝字二年の『金剛般若

經』書写―入唐廻使と唐風政策の様相―」（奈良朝仏教史攷）法藏館、二〇一五年。初出は二〇〇一年）参照。かかる政治状況が、景戒の『金剛般若經』理解、ひいては『金剛般若經集驗記』の理解の仕方に影響を与えた可能性も考えられるのではないか。

(21) 拙稿「『日本靈異記』と『冥報記』「般若驗記」―序文の思想と製作意図―」（『日本文学研究誌』第十・十一輯合併号、大東文化大学大学院、二〇一三年三月）参照。

(22) 大日本統藏経本による。